

国立歴史民俗博物館の愉悅①⑥

『形勢聞見録』



国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の収蔵品に「平田篤胤関係資料」がある。これらは、江戸時代後期の思想家・平田篤胤（一七七六～一八四三）およびその子孫が伝えた資料群であり、二〇〇四年に歴博でも「特別企画 明治維新と平田国学」と題する展

示を開催したことがある。資料群名などからは、これらが平田篤胤という人物の行動や思想を解き明かす手がかりとイメージするだろう。しかし、これらの資料群には、篤胤という一個人の思想形成に留まらず、十九世紀という時代状況を理解するための重要な歴史情報が多数含まれている。

その一例として紹介するのが『形勢聞見録』と題する資料である。正編一〇冊、追加四冊、附録一〇冊の合計二四冊で構成される同書は、篤胤の孫・平田延胤（一八二八～一八七二）による編集として知られる風説留^{ふうせつりゅう}、いわゆる政治社会の諸情報を集積した記録群である。寛政五年（一七九三）から慶応三年（一八六七）に至る膨大な政治情報は、篤胤が創始した私塾・気吹舎^{いぶきのや}を拠点として、全国各地の門人や関係者から提供され、特に幕末動乱期の諸情勢が詳細に伝えられている。

正本だけでも七〇〇件以上におよぶ諸情報を通覧すると、幕末期における政治情報伝達の一形態を理解することができる。各地からの報告は、単に諸方で確認された事実を伝えるだけでなく、真偽不確かな巷説や社会状況を勘案した憶測なども含み、これが情報提供者の感情とともにもたらされる。特に、深刻な政治対立が激化する幕末期、認識を同じくする者同士が密に交流を重ねて情報を共有するなかで、対立する勢力などへの批判的な言説が情報群として蓄積・共有される。『形勢聞見録』は平田延胤や彼の同志等と共有され、彼等が政治議論を形成するための基盤として活用されていく。

膨大な情報群を軸に構築された政治的な党派は、政治議論を重ねるなかで、やがて彼等が構想する理想的な政治社会像の実現を目指した行動を展望する。『形勢聞見録』などの情報群は、幕末維新という激動期を生きた人びとが観察した政治社会の諸相を現在に伝えている。これらの情報を通じた交流が如何なる政治・社会活動へと転化していったのか。「平田篤胤関係資料」は、幕末から明治期に至る動乱の多様な姿を垣間見ることができよう。